

中学校における「家族の生活と家族関係」の指導と 生活態度並びに家族観の変容

—生徒の自己評価から—

田 中 洋 子

(武庫川女子大学文学部教育学科初等教育コース)

Teaching “Family Life and Human Relationship” and the Changing of Students’ Lifestyles and views on Family in Junior High School

—from students’ Self-Estimation—

Yoko Tanaka

Department of Education, Faculty of Letters,

Mukogawa Women’s University, Nishinomiya 663, Japan

In junior high school curriculum, the region of “Family Life” was newly established in the technique and home-making course.

In this paper, self-estimation of the students who studied “Family Life and Its Human Relationship” in home-making course, are analysed on how the lifestyles and the views on family have been changed.

Before they studied the above-mentioned, students’ interests and expectations on their family lives and human relationships were little, and they, especially boys, were not independent from their family.

Therefore, at every opportunity in teaching “Family Life” the themes, that would interest students, were selected, so that they could study about their family lives with interest.

The results are that both boy and girl students tend to be independent in their lifestyles, and that girl students are trying to perform roles of a family member. Students’ views of their family is also changing for the better.

緒 言

中学時代は自立と依存に悩む時期であり、自分自身の生き方、家族のあり方を求めて揺れ動いている。このような時期に自己を見つめ、家族の生活や家族関係について考えさせることは、将来自らの家庭生活を営む時の家庭の教育力の基礎となるであろう。そこで、「家庭生活」領域を自分の生活と家族の生活との関連をはかる立場から学習させることにより、家族内での自分の立場を理解し、自分の役割を果たすことができるようにしたい。

また、家庭科教育では「実践的態度を育てる」ことを目標にしており、授業で学習したことが家庭生活に生かされてこそ、指導の効果が上がったといえる。今回は、「家庭生活」領域の「家族の生活と家族関係」の指導を通して、生徒の家庭における生活態度並びに家族観がどのように変容したかを探り、家族に関する指導のあり方を検討することとした。

方 法

1 調査対象生徒

兵庫教育大学学校教育学部附属中学校第1学年生徒(男子32名,女子27名,計59名)

生徒の家族状況は家族数平均5.14人,祖父母との同居率は55.8%と過半数の家庭が拡大家族である.

2 調査期間

(1) 事前調査

平成3年7月

(2) 事後調査

平成4年3月

3 調査方法

質問紙法による4段階評定尺度法及び自由記述法

4 調査内容

(1) 事前調査

① 「家族の生活と家族関係」に関する学習調査表

「家庭生活の意義」「家族の役割」「家族関係」などに関して小学校の教育や家庭生活のなかでどのようなことを学習してきたか(学習状況),これからどのようなことを学習したいと考えているか(学習希望)について, **Table 1** の調査を実施した. 質問項目の設定にあたっては,「教科学習の心理学」¹⁾の家庭領域の質問項目を参考にした.

Table 1. The Research Table on the Family

()組 ()番 氏名()

	学 習 状 況				学 習 希 望			
	よく知っている	知っている	知らない	考えたこともない	もっと知りたい	少し知りたい	あまり知りたくない	知らなくてもよい
① どうして家族は同じいえで一緒に生活しているのでしょうか	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
② あなたにとって家族とはどんな役割を持っているのでしょうか	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
③ あなたは家族のために何ができるのでしょうか	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
④ お父さんやお母さんは家族のために何をして下さるのでしょうか	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
⑤ お父さんやお母さんはどんな仕事をしておられるのでしょうか	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
⑥ どうして手伝いをしなければいけないのでしょうか	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
⑦ 家族みんながなかよく暮らすためにはどんなことに気をつけたらよいのでしょうか	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
家族のことについて,他に学習したいことがあれば書きなさい.								

Table 2. The Table of Self-Estimation on Family Life and Its Human Relationship

調査年月日 平成()年()月()日
()組()番 氏名()

	いつでもできる	だいたいできる	あまりできない	できない	⑧ 家族が協力しあって暮らすために努力していること	
① 自分でできることは自分でする	□	□	□	□	⑨ 家族が協力しあって暮らすために努力したいと考えていること	
② 家族にあいさつができる	□	□	□	□		
③ 家族そろって朝食を食べる	□	□	□	□	⑩ あなたは自分の家族をどのように考えているか	
④ 家の手伝いをする	□	□	□	□		
⑤ 家族そろって夕食を食べる	□	□	□	□	⑪ 家族はあなたをどのように考えていると思うか	
⑥ 家族団らんの時間がある	□	□	□	□		
⑦ 父や母と話をする	□	□	□	□		

② 「家族の生活と家族関係」自己評価表

生徒が家庭のなかでどのような生活を送っているのかを知るために、家庭での生活態度(生活の自立、あいさつ、手伝い、団らん、会話等)、生徒の家族観、生徒が予想する家族の生徒観などについて、Table 2の調査をした。質問項目の設定にあたっては、生徒にこうあってほしいと望む生活態度並びに家族の一員として家族に働きかけ、家族とともに考えてほしい内容とした。

(2) 事後調査

事前調査で用いた「家族の生活と家族関係」自己評価表を用いて、生徒の生活態度並びに家族観がどのように変容したかを調査した。

結果と考察

(1) 「家族の生活と家族関係」に関する関心・意欲

「家族の生活と家族関係」に関する男女別の学習状況はTable 3のとおりである。

Table 3. Learning Condition (degree of knowledge)

	①		②		③		④		⑤		⑥		⑦	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
よく知っている	3.1	14.8	25.0	22.2	6.3	11.1	43.8	25.9	59.4	51.9	21.9	29.6	6.3	25.9
知っている	15.6	22.2	28.1	33.3	37.5	51.9	40.6	66.7	34.4	44.4	31.3	55.6	18.8	37.0
知らない	21.9	18.5	28.1	25.9	31.3	25.9	9.4	3.7	6.3	3.7	25.0	11.1	25.0	18.5
考えたこともない	59.4	44.4	18.8	18.5	25.0	11.1	6.3	3.7	0.0	0.0	21.9	3.7	50.0	18.5

Table 4. Learning Condition (degree of will)

	①		②		③		④		⑤		⑥		⑦	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
もっと知りたい	9.4	7.4	12.5	11.1	12.5	11.1	21.4	11.1	28.1	25.9	6.3	7.4	25.0	14.8
少し知りたい	31.3	59.3	25.0	70.4	12.5	59.3	14.3	81.5	15.6	40.7	21.9	37.0	9.4	77.8
あまり知りたくない	31.3	33.3	31.3	7.4	37.5	22.2	42.9	7.4	31.3	25.9	28.1	51.9	31.3	7.4
知らなくてもよい	28.1	0.0	31.3	11.1	37.5	7.4	21.4	0.0	25.0	7.4	43.8	3.7	34.4	0.0

χ^2 検定の結果、⑦にのみ男女間で有意差が認められた。学習状況において「考えたこともない」と答えた生徒は学習内容に「関心がない」と捉えた。

質問①に対して、男子 59.4%、女子 44.4% が「考えたこともない」と答えており、家庭生活の意義については、男女ともに関心が低い。

また、質問⑦では、「考えたこともない」と答えた男子が 50.0% であるのに対し、女子は 18.5% である。家族関係については、男子よりも女子の方が関心が高い。

学習状況調査と同じ内容で、学習希望について調査した結果が Table 4 である。

χ^2 検定の結果、すべての項目において、男女間に有意差が認められた。学習希望について「もっと知りたい」と答えた生徒は学習意欲が高く、「知らなくてもよい」と答えた生徒を学習意欲が低いと捉えた。

「家族の生活と家族関係」の学習内容については、男女間の学習意欲の差が大きい。この領域については男女の発達段階の差だけではなく、家族の家庭生活のあり方や家庭教育方針にも影響を受けていると考えられる。

(2) 指導計画の作成と授業の展開

「家庭生活」領域の指導は平成 3 年 10 月から平成 4 年 3 月まで、週あたり 2 単位時間、計 35 単位時間である。そのなかで、「家族の生活と家族関係」に 6 時間をあてることとした。さらに、「家庭の仕事」「家庭の経済」「家庭生活と地域社会」など指導にあたっては、あらゆる場面で家族のことにふれ、家族関係の大切さについて考えさ

Table 5. Teaching Plan on Family Life²⁾

目標

- ・まる子の家族と自分の家族を比較して、自分や家族の課題に気づかせる。
- ・自分が家族の一員として、かけがえのない存在であることに気づかせる。

1 単位時間

学習内容	時間	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	教材・資料
本時の学習目標の確認	(分) 5	・本時の学習目標を確認する。	・家族の生活について学習することを確認させる。	
家族の生活	15	・VTR 視聴	・VTR 視聴の視点を明確にする。	VTR「ちびまる子ちゃん」
	10	・まる子の家族の生活についてまとめる。 ① 家族構成 ② 家族全体の雰囲気 ③ まる子の長所、短所 ④ 家族はまる子をどのようにみているか ⑤ まる子は家族をどのようにみているか	・まる子の家族と自分の家族を比較しながらまとめさせる。 ・②～⑤については食事の情景、あいさつなどの日常生活のマナー、家族の会話などから考えさせる。	ワークシート
	10	・各自が気づいたことをもとに、グループ討議をし、まる子の家族について考える。 ・グループでまとめたことを発表する。	・机間巡視をし、討議の目的を達成させる。 ・自分の家族のことについては発表を強要しない。	
まとめと次時の予告	10	・家族の生活について学習したことをまとめる。 ・次の時間・学習することを聞き、課題を確認する。	・テレビのチャンネル権争いの場面を想定してロールプレイングをすることを予告し、演じるグループを選出させる。	

中学校における「家族の生活と家族関係」の指導と生活態度並びに家族観の変容

Table 6. Teaching Plan (family relationship)³⁾

目標

- 健全な家族関係のためには、円満な家族関係が大切であることに気づかせる。
 - 円満な家族関係のためには、家族がそれぞれの欲求を調整すること、団らんの時間を大切にすることの重要性に気づかせる
- 1 単位時間

学習内容	時間	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	教材・資料
本時の学習目標の確認	(分) 5	•本時の学習目標を確認する	•VTR でみたテレビのチャンネル権争いの場面を思い出させる。 •ロールプレイングにより家族関係について学習することを確認させる。	
家族関係	10	•ロールプレイングでテレビのチャンネル権争いをみる。	•ロールプレイングを演ずる者、みる者の心構えを注意する。	
	5	•ロールプレイングをみて(演じて)感じたことをまとめる。 ①感想 ②チャンネル権争いの原因 ③解決法	•自分の家庭と比較しながら考えさせる	ワークシート
	10	•各自がまとめたことをもとに、グループ討議をし、チャンネル権争いの解決法を考える。 •グループでまとめたことを発表する。	•机間巡視をし、討議の目的を達成させる。	
	7	•団らんの大切さについて考える。	•家族が一つの部屋に集合すること、共通の話題をもつことなどの大切さに気づかせる。	
	8	•団らんのためには、各自が自分の欲求を調整することの必要性について考える。	•家族がそれぞれの欲求を調整するとともに、互いに尊重し合い、支え合いながら生活することの大切さに気づかせる。	
まとめと次時の予告	5	•家族関係について学習したことをまとめる。 •次の時間学習することを聞き、課題を確認する。	•家族の一員としての自分の役割について学習することを予告する。	

せるよう心がけた。

家族は社会生活を営むうえで、最も基本的な集団であり、生徒にとって最も身近な社会である。その家族がまとまりのある家族集団として存在するためには次のような条件が満たされることが望まれる。

- ① 家族が共通の目標をもち、一人一人がその目標を理解し、目標達成に向けて努力している。
- ② 家族が互いに心理的につながっていて、家族集団への帰属意識がある。
- ③ 家族員一人一人が、役割を分担している。
- ④ 家族員一人一人の欲求が満たされている。

しかし、家庭生活の実態は各家庭さまざまであり、望ましい家族かどうかの判断は家族それぞれの感じ方によるものであり、他人に判断できるものではない。そこに「家族の生活と家族関係」を指導する難しさがある。

また、中学時代は家族の生活に反発しながらも、家族からはなれて生きてゆけない現実の自分を目の前にして、自立と依存に悩む時期である。このような時期だからこそ、男子生徒の関心・意欲が低いとしても「家族の生活と家族関係」について指導するのに適しているとも考えられる。ただ、中学生という発達段階から考えると、自分の家庭生活を赤裸々にしたくないという自尊心も働く、そこで、次のような題材選定の視点から、当時生徒たちの間で人気の高かった「ちびまる子ちゃん」の家族を共通の題材として取り上げた。

- ① 生徒が興味・関心をもち、意欲的に学習できる。
- ② 家庭生活の特徴や課題に気づくことができる。
- ③ 主人公の家族と自分の家族を比較することにより、家族の課題に気づくことができる。
- ④ ロールプレイングをさせることにより、生徒の主体的な活動場面を多くすることができる。
- ⑤ ワークシートの活用により、生徒の実践活動を促すことができる。

Table 7. Standard Deviation of Lifestyle

	男 子				女 子			
	7 月		3 月		7 月		3 月	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
① 自分のことは自分で する	1.71	0.48	1.90	0.64	1.71	0.48	2.12	0.42
② 家族にあいさつが できる	2.19	0.87	2.26	0.78	2.19	0.87	2.65	0.55
③ 家族そろって朝食 を食べる	1.45	1.22	1.61	0.74	1.45	1.22	0.85	0.68
④ 家の手伝いをする	1.23	0.69	1.39	0.67	1.23	0.69	1.62	0.59
⑤ 家族そろって夕食 を食べる	1.44	1.12	1.77	0.71	1.44	1.12	1.73	0.78
⑥ 家族団らんの時間 がある	1.07	0.53	1.35	0.61	1.07	0.53	1.65	0.69
⑦ 父や母と話を する	2.32	0.67	2.23	0.75	2.32	0.67	2.04	0.70

Table 8. Efforts Made to Live in Cooperation with the Family

	項 目	男 子		女 子		計	
		7月	3月	7月	3月	7月	3月
		家族の一員としての役割をはたす					
手 伝 い を する	8	9	2	7	10	16	
自分でできることは自分で する	0	5	3	8	3	13	
水 の 節 約	0	0	2	0	2	0	
電 気 の 節 約	0	0	1	0	1	0	
皆が皆のことを考えて 動く	0	0	1	2	1	2	
家の人に言われたこと をよく聞く	1	1	0	0	1	1	
勉 強 す る	1	1	0	0	1	1	
家の仕事を分担する	0	0	0	1	0	1	
家族と話を する	3	2	3	4	6	6	
一緒に食事を する	1	1	3	2	4	3	
暖かい雰囲気作り							
励まし合いながら暮 らす	0	0	3	1	3	1	
きれいに する	1	0	1	0	2	0	
花 を 飾 る	0	0	2	1	2	1	
あいさつを する	0	3	1	2	1	5	
けんかを しない	1	1	0	0	1	1	
皆の意見に 合わせる	0	0	0	1	0	1	
そ の 他							
な い	6	5	3	1	9	6	
わ か ら な い	3	2	3	0	6	2	
未 記 入	6	0	3	1	9	1	

授業の展開例(2時間分)は Table 5・6 のとおりである。指導にあたっては、生徒一人一人の生活環境や生活経験を配慮し、プライベートな内容については、授業中の発表を強要せず、教師と生徒一対一で指導するよう心がけた。

(3) 生活態度の変容

授業前(7月)と授業後(3月)の生活態度を点数化して比較したものが Table 7 である。点数化にあたっては、「いつもできる」を3点、「だいたいできる」を2点、「あまりできない」を1点、「できない」を0点として平均点及び標準偏差を求めた。男子は、「自分のことは自分でする」(1.71→1.90)「家族にあいさつができる」(2.19→2.26)「家族そろって朝食を食べる」(1.45→1.61)「家の手伝いをする」(1.23→1.39)「家族そろって夕食を食べる」(1.44→1.77)「家族団らんの時間がある」(1.07→1.35)「父や母と話をする」(2.32→2.23)と、「父や母と話をする」以外の6項目で7月よりも3月の方が平均点が高くなった。しかし、t検定により有意差を検定した結果、7項目すべてにおいて有意差は認められなかった。女子は、「自分のことは自分でする」(1.71→2.12)「家族にあいさつができる」(2.19→2.65)「家族そろって朝食を食べる」(1.45→0.85)「家の手伝いをする」(1.23→1.62)「家族そろって夕食を食べる」(1.44→1.73)「家族団らんの時間がある」(1.07→1.65)「父や母と話をする」(2.32→2.04)と、「家族そろって朝食を食べる」「父や母と話をする」という2項目で平均点が低下していた。「父や母と話をする」という項目以外の6項目で有意差が認められた。女子には、自分一人で実行可能な場面では、ある程度の生活態度の変容が認められる。この男女差については、今後一層、題材の選定、指導内容、指導方法等の改善を図ると同時に、家庭科通信、学級・学年通信などを利用して保護者の理解を求めることも必要である。

「家族が協力しあって暮らすために努力していること」について自由記述させた結果を分析したものが Table 8 である。「手伝いをする」(10名→16名)「自分でできることは自分でする」(3名→13名)「皆が皆のことを考えて動く」(1名→2名)「家の仕事を分担する」(0名→1名)の人数が増加し、家族の一員としての役割を果たそうと

Table 9. What Do you Think of Your Family?
(positive image)

	項 目	男子		女子		計	
		7月	3月	7月	3月	7月	3月
プ ラ ス イ メ ー ジ	よ い 家 庭	11	7	4	3	15	10
	明 る い 家 庭	3	1	7	2	10	3
	楽 し い 家 庭	2	1	5	4	7	5
	暖 か い 家 庭	0	1	3	3	3	4
	頼 り が い が あ る	2	1	0	3	2	4
	や さ し い	2	1	0	2	2	3
	相 談 に の っ て く れ る	0	2	1	0	1	2
	話 せ る	0	0	1	3	1	3
	健 康 的 な 家 族	0	0	1	0	1	0
	平 和 な 家 族	0	0	1	0	1	0
	家 族 が い て よ か っ た	0	1	1	0	1	1
	個 性 的 な 家 族	0	0	1	0	1	0
	見 守 っ て く れ る	0	0	1	1	1	1
	な い と こ ま る	1	0	0	2	1	2
	天 才	1	0	0	0	1	0
	大 切 な 家 族	0	2	0	5	0	7
く つ ろ ぐ と こ ろ	0	1	0	2	0	3	
協 力 し て い る	0	2	0	1	0	3	
身 近 な 人	0	1	0	0	0	1	
す ば ら し い 親	0	1	0	0	0	1	
あ り が た い	0	1	0	0	0	1	
計		22	23	26	31	48	54

Table 10. What Do You Think of Your Family?
(negative image, etc.)

	項 目	男 子		女 子		計	
		7月	3月	7月	3月	7月	3月
マ イ ナ ス イ メ ー ジ	う る さ い	3	5	3	2	6	7
	家 族 そ ろ っ て 食 事 を し た い	0	0	1	1	1	1
	仲 良 く し た い	0	0	1	0	1	0
	こ わ い	1	0	0	0	1	0
	き ら い	1	0	0	0	1	0
	く ら い	0	1	0	0	0	1
	計		5	6	5	3	10
そ の 他	普 通	1	1	1	1	2	2
	一 緒 に 暮 ら し て い る メ ン バ ー	0	3	1	0	1	3
	わ か ら な い	3	2	1	2	4	4
	未 記 入	5	0	0	2	5	2

する姿勢が伺える。特に「自分でできることは自分でする」は男女ともに5名ずつ増加し、自立しようとしている様子が伺える。「手伝いをする」については、男子が1名の増加に対し、女子は5名増加している。男子よりも女子の方が家族の一員としての役割を果たそうとしていることが伺える。

家庭内で温かい雰囲気づくりをしようとする内容に関しては、「あいさつをする」(1名→5名)「皆の意見に合わせる」(0名→1名)の人数が増加している。「あいさつをする」というような自分一人ではできないことは増加しているが、「家族と話をする」(6名→6名)「一緒に食事をする」(4名→3名)「励まし合いながら暮らす」(3名→1名)というように、自分一人ではどうしようもない内容については増加していない。

また「ない」「わからない」あるいは未記入が24名から9名に減少している。

以上のことから、家族の一員としての役割を果たそうとする生活態度はある程度身につけているといえるが、「家族そろって食事をする」というように、家族に働きかけて生活の改善を図るところまでは成長していない。

(4) 家族観の変容

「自分の家族をどのように考えているか」という自由記述の内容を分析すると、Table 9・10 のようである。

プラスイメージの記述数は48個から54個に増加している。プラス方向でイメージが膨らんでいるといえる。「よい家庭」(15名→10名)「明るい家庭」(10名→3名)「楽しい家庭」(7名→5名)というイメージから「大切な家族」(0名→7名)「くつろぐところ」(0名→3名)「協力している」(0名→3名)「たよりがいがある」(2名→4名)など、家族の役割を認識したイメージへの変化が伺える。マイナスイメージでは、「仲良くしたい」(1名→0名)「こわい」(1名→0名)「きらい」(1名→0名)という記述がなくなったが、「うるさい」(男子3名→5名、女子3名→2名、計6名→7名)という記述が男子で増加している。以上のことから、家族の役割について学習した結果、好ましい方向へ家族観が変容したと判断できる。

今回はデータとしては取り上げていないが、「家族はあなたのことをどう考えていると思うか」という質問に対

(田 中)

する自由記述をまとめると、プラスイメージの記述数は8個から11個に増加している。マイナスイメージは記述項目数が12項目から6項目へ半減し、記述数も18個から15個に減少している。プラスイメージのなかで、「大切」という記述が1名から3名に増加し、マイナスイメージのなかで、「うっとうしい」「じゃま者」「迷惑をかける子」などの記述が消えたことから、自分が家族のなかでかけがえのない一員であることが少しわかり始めたといえることは、学習効果のあらわれと判断できる。

ま と め

中学校技術・家庭科に「家庭生活」領域が新設された。そこで、「家庭生活」領域の「家族の生活と家族関係」の指導を通して、生徒の家庭における生活態度や家族観がどのように変容したかを、自己評価により分析することを試みた。指導前の「家族の生活と家族関係」に関する生徒の関心・意欲は低く、生活態度も自立しているとはいいがたい現状であった。特に、男子にはその傾向が強い。そのため、生徒が興味・関心をもって学習できそうな題材を選定するとともに、「家庭生活」領域の指導にあたっては、あらゆる機会を通じて家族の大切さについて考えさせるようにした。その結果、生活態度は男女とも自立の傾向にあり、女子では、家族の一員としての役割を果たそうとしていることが伺える。また、家族観もよい方向に変容している。

今後の課題として、これらの変容に授業以外の要素がどのように関係しているのかを検討すること、今回は、小規模校で事例数が少なかったため、さらに実践を重ね、検証することが必要である。

引用・参考文献

- 1) 高木和子, 教科学習の心理学, 辰野千寿ら編, 図書文化, 東京, pp220-221(1978)
- 2) 田中洋子, 研究紀要第102集, 兵庫県立教育研修所, pp77(1991)
- 3) 田中洋子, 研究紀要第102集, 兵庫県立教育研修所, pp78(1991)